

論文の要旨

本論文は、江戸時代の俳人芭蕉の日本近世および近代における受容のありかたを明らかにした考察である。全体は序章と終章を除き、次の五つの章を本論として構成されている。

第一章では、中国近代の文学者周作人が蕉風俳諧を評論する時に多用した「閑寂」という評語と、明治期の新旧両派俳人の著作の相互関係について論じている。

周作人は、日本での留学生活を一九一一年（明治四十四）年に終え、中国に帰国。次々と日本文学・日本文化についての論を発表するが、その中の蕉風俳句に触れた論文には「閑寂」という評語が多用されている。

周が留学していた当時の日本の俳壇における旧派俳人は、江戸時代の俳人と同じように芭蕉を神格化した。そこで使われたキーワードは「閑寂」という評語であり、それは「禅」と結びつけられていた。芭蕉は、いわば「芭蕉・禅・閑寂」という形で三位一体化され、明治俳壇の芭蕉論の主流を占めることとなっていた。一方、新派俳人もまた、神格化された芭蕉像自体には異議を唱えず、評論においても「閑寂」という評語を多用した。

周作人のいわゆる「蕉風俳句閑寂論」は、決して特殊な解釈ではなく、日本留学時代の俳壇における評論をもとに自然に得られた芭蕉論であり、「閑寂」という評語もまた、それらの評論から得られた言葉であったことを論じている。

第二章では、明治期の俳壇における蕉風評論のキーワードであった「閑寂」という評語が、江戸時代の蕉風評論から受けついだものであるかどうか、について考察を加えている。

芭蕉崇拜のブームが高まった江戸時代、芭蕉神格化は芭蕉百回忌の前後にクライマックスを迎えるが、そこで盛んに使われていた評語は「さび」という言葉であり、明治期の俳壇で使われた「閑寂」という言葉の使用例は無きに等しい状態であった。それが明治期に入ると「閑寂」という評語に置き換えられてしまう背景には、主に明治開国期における漢語ブームの流行があったのではないかと論じている。

徳川幕府の旧体制から近代国家の社会基盤を打ち立てるために、政府、知識人たちは、政治、法律、医学等における新概念を西洋から日本へ導入したが、そこに用いられた言葉の訳語も大量に作られた。そしてその訳語のほとんどは漢語であった。神格化された芭蕉像は、明治期の俳壇においても江戸時代と変わることはなかったが、江戸時代の蕉風評論用語としての「さび」という評語は、漢語を主体とした漢文脈全盛の時代背景の中で、漢文脈にふさわしい「閑寂」へと置き換わっていった、と指摘している。

第三章では、第一章を踏まえ、明治期の旧派俳人の所謂「芭蕉・禅・閑寂」の論調が、大正時代へどのように流れていくのか、を論じている。

大正期の俳壇においては、芭蕉を神格化した調子で記す評論はかなり少なくなったが、完全に無くなったわけではなかった。その一つに、俳人木津碩堂の『新しい芭蕉翁の面影』（石塚松雲堂・大正十一年刊）がある。木津の著作では、明治の旧派俳人の唱えた「芭蕉・禅・閑寂」とい

う三位一体の方向に沿いながら、芭蕉神格化がなお執拗に主張されているが、これと似た芭蕉評論は、木津の著作以外にはもはやほとんど見られなくなっている。

一方、俳人岡本黙骨は、「芭蕉行脚十八箇条」を論拠に、芭蕉の人間味や人格面に注目して、芭蕉を等身大の人間として見ていこうとする新しい説を提唱し、大正期の芭蕉評論の主流となっていく。このような動きの背景には、子規と虚子の強い影響力があったのだ、と氏は指摘している。虚子は、子規の「古池写生論」を『ホトトギス』紙上に祖述しながら、その影響力を俳壇に強めていた。俳句の革新に必ず言及していた子規および虚子の芭蕉論は、大正俳壇における芭蕉論を理性的に促進させる大きな要因となった、と論じている。

第四章では、昭和戦前期の中高等学校の古典教育における芭蕉像に注目しながら、その時代における芭蕉受容のありかたを論じている。

昭和前期における芭蕉評論は、明治期以来勢いを増してきた国粹主義、ナショナリズムの高揚という時代背景の中で、それまでとは異なった傾向を見せ始めていた。具体的には、芭蕉の人物像を、「人格者」「求道者」「隠遁者」「俳道に精進した俳人」という言葉を用いて、道德面、人格面から理想的な人間として描くようになっていたことである。当時中高等学校で使われていた教科書や教師用指導書においても、芭蕉の作品、ことに『奥の細道』は、これらの人格を備えた人間の記した作品としての面が強調された。

その一方で、志田義秀や保田與重郎のように、当時の教学局の依頼に応じて、「敬虔な国民を育成する」、あるいは「愛国心ヲ成育スル」という教育方針と合致させ、「尊皇」「敬神」「崇仏」の芭蕉像、いわば「戦時下の国民の模範」である芭蕉像も作りあげられていた。この芭蕉像の二面性こそが昭和戦前期の芭蕉受容の特徴である、と氏は結論付けている。

第五章では、昭和戦前期の芭蕉入門書における芭蕉像について検討を加えている。

昭和戦前期に出版された一般庶民向けの芭蕉入門書には様々なタイプがあったが、基本的には、専門的な芭蕉研究資料と同じように、芭蕉を神格化せず、芭蕉を「俳道に精進した詩人」「隠遁者」「人格者」「道德者」などとする点では同じであった。しかし、ますます迫ってくる戦争の足音の中で、そのような芭蕉像も、時局に見合った「国民」の手本と直接結びつけられるものへと変質していく。すでに専門的な芭蕉研究資料の中にあつた芭蕉像、すなわち「教育的意義」を持たせた「敬虔な国民」という図式は、このような一般向け入門書の中で、ますます強調され、普遍化され、芭蕉は、戦時下の国策に沿った「国民」を作り出すための格好の宣伝道具として利用されていった、と論じている。